

新入生の英語学習意識と授業計画及びその評価

吉 家 哲 夫

はじめに

筆者は初めて教壇に立ってから6年になる。その間、自分の英語の授業は学生にとって適切なのか、ということがいつも気になっていた。その為、毎年主に一年生に対して色々質問を変えてアンケートを実施した。そして2001年4月、それまでのアンケート結果と前年の予備調査を踏まえて、新入生が英語の学習に関して抱いている意識を探る為に、新学期一回目の授業の最初にアンケートを行なった。

本稿では、その調査結果を概説しながら自分が実行している授業計画と突き合わせ、その後2001年度の学年末に実施した学生による授業評価について記したい。

I アンケート結果

対象の学生は、史学科、国文学科、芸術文化学科の新入生、それぞれ157名、45名、10名、合計212名である。(調査用紙は末尾に添付)

1. 83%が「英語嫌い」

「嫌い」と「あまり好きではない」を合わせるとこの数字になる。「嫌い」は42.4%である。一方「とても好き」は1.9%、「好き」は5.7%である。残り9.4%が「どちらでもない」である。

対象者は未だ大学での学習の影響を全く受けていないから、この数字は中・高での英語学習の結果であるが、その原因を教える側の教師にのみ帰するのは妥当性を欠くだろう。外国語の学習は自然に覚えられる母国語と違って習得には相当の努力を要するし、努力の割に上達は遅々として進まないものである。又、どちらかという苦しいこと、嫌なことは避けて通る現代っ子気質を考え合わせると、この驚くべき数字も納得出来るというものだ。

筆者の場合「入学時より更に英語嫌いにならない様に教える」ことを基本方針としている。その具体策として重視するのは、適当なレベルの設定と、授業の中で学生に過度のプレッシャーを与えないことである。学生の全員が満足するレベ

ルというのは設定し得ないので、最も多いと思われる中間層を基準にする。そうすると自然、使用する教材は難度の高くないものに傾くことになる。

2. 「嫌い」の理由のトップは「文法」

「文法」と答えた者は32.4%、次いで「熟語」26.5%、「単語」23.5%、「発音」12.2%となっている。

文法を網羅的に教えられると学習意欲の低い者はかなり苦痛を覚えるものだ。滅多にお目に掛からないような文法事項まで教え込まれるからである。筆者自身の遠い昔の受験時代の体験では、誤文訂正の問題集に取り組んだことが最も役に立った。これの良い所はどんな文法事項が実際に重要かが分かることである。そこで筆者は授業の中での「文法」の説明は、その時学習している英文の正しい理解のために必要なこと、或いは、正しく英語で表現するために必要なことに限定している。又、無用の心理的抵抗を感じさせないように文法用語の頻用は避ける。学生の多くは文法用語自体の日本語としての意味を余り考えたことがない様に感じられるので、それを分かり易く説明する。例えば、前置詞とは名詞（又は、名詞的なもの）の前に置く詞、という風に。

「単語」はそこでの意味に止まらず、原義にも触れるようにして語義の派生に気付かせる。他動詞の場合、一部の辞典でしているように日本語の助詞、‘に’や‘を’をつけて教える。自動詞の場合、必要に応じて前置詞もつけて連語として教える。「熟語」はなぜそのような意味が出て来るのか、こじつけを承知で説明を試みる。単純な暗記ばかりでなく、少しでも頭を使って推理する習慣をつけさせたいと思うからである。

「発音」に関連して、筆者の授業では一人一人指名して音読をさせている。すると、単語の語尾のt, dをト、ドと読む者が多い。she と sea の区別が出来ない。母音の前のtheの発音は殆ど間違える。どうも今迄音読をさせながらの細かい指導が少なく、従って習慣化がなされていない様だ。筆者が授業で最も注意するのはlとrの違いなどよりアクセントである。しっかりアクセントをつけないと英語に聞こえないと繰り返し指導している。

3. 「嫌い」の始まりは早い。

「嫌い」な者のうち、30.4%が既に中1でそうになっている。中2も加えると52.1%となる。中学時代のいつか、と答えた者を加えたトータルは、71.7%に

及ぶ。

これだけ多くの生徒が嫌だ、嫌だと思いながら、更に高校の三年間やむを得ず英語の授業を受けてきた訳である。嫌々学ぶ英語の学力がその間に伸びる筈もない。見方を変えれば中学校の英語教育が如何に大切かということでもある。

4. 91.4%が英語は「難しい」と思っている。

「さほど難しくない」と答えた者が6.2%いるが、「易しい」は皆無である。これだけ多くの生徒が「難しい」と思う科目の習得到達度について高いレベルを期待するのは初めから無理がある様に思える。又、この数字を見たら、生きて行く為に英語を必要とする訳ではないこの国での「英語第二公用語論」など如何に非現実的なものか明白であろう。国語である日本語の習得が不十分であることが問題視されている状況の下で「第二公用語論」が出て来ること自体正気の沙汰とは思えない。

5. 「難しい」原因のトップはここでも「文法」

「文法」は21.4%、次いで「英訳」20.6%、「文型」16.7%、以下「和訳」13.6%「熟語」11.9%「単語」8.7%「発音」6.3%となっている。「和訳」よりも「英訳」が多いのは肯ける数字である。

6. 一度も「英語で考えている」と感じたことがない、と答えた者は67.9% (無回答も含めると79.7%)

筆者は以前Thinking in Englishについて小論を書いたことがある。このような、実感を得にくいことを学習の途上にある生徒に要求することの教育的効果に大きな疑問を抱いていたからである。ところが実際に教師からこの言葉を聞かされた生徒が24.5%おり、更に問題なのはこのうち50%が中学で言われていることである。こんな言葉で生徒にハッパをかける教師の何人が本当に「英語で考えている」であろうか。どうも近頃は実体のない恰好だけの空虚な言葉が氾濫しているように覚えてならない。教師の言葉を真面目に受け止める生徒にとっては大きなマイナスのプレッシャーを与えていることになるだろう。要求されていることが出来ないと感じれば、それは意欲喪失に繋がるだろう。但しこれを、英語を学ぶ為の方法論でなく到達目標として掲げるのならば反対はしない。

一方「英語で考えている」と実感した経験のある者は19名(9%)いるが、

どのような時に感じたかを聞くと5名が「外人と話したとき」、2名が「英問英答のとき」、1名が「高校のとき英語の長文を作ったとき」と答えた。他は「実感」を錯覚したとしか思えない場面が記されていた。

筆者は本人がどのように意識しようと日本語が頭の中に一杯詰まっているのに日本語を介在させずに言語操作をすることなど全く有り得ないと思っている。マーク・ピーターセン氏は「英語のことを英語で考えても日本人の英語の問題は見えてこない。日本語で考えてみて初めてその苦手の原因が浮かび上がってくる」と言っている。又、土屋氏は「四六時中日本語でものを考えている生徒に、英文を読む時だけ全部英語で考えろと言っても無理であろう」と書いている。

これらから筆者の授業では、「英語で考えることを意識させない」方針に立ち、毎回授業の始めに行なう「前回の復習」では、寧ろ積極的な意味で日本語からそれに対応する英語を想起させることを一種の小テストとして行なっている。

7. 「楽しさ」に関して

(1) 生徒が「楽しめる」授業は学習効果が少ないと考えられる。

48.1%の者が「楽しい」と思ったことがある。その楽しい経験の多くはALT絡みである。「楽しかった」英語の学習についてその効果を聞くと、「楽しかったが余り役立っていない」が38.2%を占める。次が「興味を持つようになった」で37.3%。一方、「そのおかげで今私は英語が出来る」は2%に過ぎず、「英語力をつけるのに役立った」も13.7%どまりである。

筆者は現在のように中学・高校でALTを使うことには懐疑的である。ALTによる授業は英語の歌を唄う、ゲームをするなど「英語を学ぶ」というより「英語で遊ぶ」という面が多い様である。又、ALTが一方向的に喋る形になりがちで生徒の方は全くの聞き役に回ってしまう傾向がある様だ。ALTの真価は生徒の英語力がかかりあってALTとの間に会話のピンポンが成り立って初めて発揮されるものだろう。中学校でALTの助けを借りても現実には外国人に慣れるという程度の効果しかないのではないか。今年再試になった4年生にレポートを書かせたところ、その昔ALTが見せた、侮辱的な態度に触れていた。ALTでも日本語を学んだ経験を持たない者には我々日本人が英語を憶えるためにどんなに苦心をしているかなど決して分からないであろう。何の努力も要さず自然に覚えた英語を話せるからといって尊大な態度を取られては堪ったものではない。だから自分の教える学生達にはつい、何年も日本に居ながら日本語を少しも喋れないnative

は尊敬に値しないとってしまう。何れにしても、ALTの有用性についてそろそろ再検討を加えるべき時期が来ている様に思う。効果を期待するなら寧ろ英語力が或る程度ついている大学生にALT授業を集中すべきではないか。

(2) 英語の学習が楽しい筈だと思っている者が53.8%を占める。「楽しい筈がない」が41.5%。

「楽しい授業」の体験者が48.1%だったのに、「楽しい筈」が5ポイント以上多い。この数字には何かにつけて「楽しさ」を求める現代の風潮が感じられる。

筆者の授業では最早「楽しさ」は追わないし、「楽しくない授業」と言われてもたじろがないことにしている。多くの場合、学生の求める「楽しさ」というのは‘笑える’ような楽しさである。そうではなくて未習得の英語を学ぶことに知的満足を感じる学生が少数でも居れば良いと考えることにしている。楽しみ多かれど学ぶこと少なし、ということにはしたくない。

8. 「英語を使っている」という充実感は外国人と話す時に感じている。

ホームステイのとき、ALTとの会話等である。中に2人だけ「英語で文章を書くとき」、「実際に英語で話しているとき」と答えた者がいる。つまりこの2人は英語をoutputしている時に「使っている」という実感を持ったのであり、実体のある体験と言える。ホームステイとかALTとの会話も英語を使っていることに変わりないが、そのチャンスや時間数において自ずから限界があるから、後者のように外国人やALTの存在と関係なくoutputの訓練の場を頻度高く持たせることが一般の学生が置かれている学習環境に則していると言えよう。

9. 高校でのコミュニケーションの授業の評価は低い。

会話力をつけるのに役立ったかを尋ねると、「あまり役立っていない」が30.3%、「全く役立っていない」が16.3%である。「よく分からない」が38.5%。「役立ったと思う」は12%である。

低い評価の原因の大部分は、学ぶ側の力不足にあると思うが、「役立っていない」と思う理由として、「それらしい授業になっていなかった」というのがある。文部科学省が指導要領を発すれば現場がそれに即応出来ると思うのは現実を知らないとしか言い様がない。小学校の早期英語教育についても然りで、偶々知り合ったALTが「私は小学校に教えに行っている。小学生に教えているのではなく、相手は小学校の先生です」と語っていた。

役立っていない理由として「折角覚えても使うことがないから駄目になる」というコメントが多く見られた。筆者はこのコメントに「なぜ日本人は英語を話せないか」の真の原因を見るのであるが、この点は後述する。

ここで、時代は少々古いが田中菊雄氏の著書から引用したい。コミュニケーション中心の授業が陥り易い問題点を指摘している。

「(富山高校一年を受け持って) 私のやった方法はむしろ平凡だった—— 読解を主としてoralの方面は外人まかせにしておいた。それでも私の授業はまあ一応無難であった。その翌年初年級を受持たれたKという先生は最初の一学期全然文字を教えないでオーラル一点張り、Jonesのトランスクリプションだけをやった。ところが学生は非常に不平で後々までもおれたちの力の足らんのはそのためだとこぼしていた。」

「最近(1953-4年頃、筆者注)のオーラルを主とした中学初年級の研究授業を参観して心から敬服させられることがしばしばある。非常な骨折りだと思う。しかし、いささか残念に思うことがないでもない...あの時代の生徒を外国の小学一年生と同じように扱うのは考え物だと思う。」

10. 95.7%が会話に自信がない。

「全く駄目」が、59.9%で、「あまり自信がない」が35.8%、「なんとか出来る」が4.2%で、「かなり自信がある」は皆無。会話の力をつけたのは「自分の力」と認識している学生は僅か2名であった。

筆者の考えでは、1クラス60名前後の教室で学ぶ学生が会話力をつけようとするれば、教室で教師と話すことより教室外で自分独自で話す訓練をするしかない。会話の為の語彙や表現のinputは教室ですてやれるが、習ったことを身につけるには学生自身のoutput訓練によるしかない。極論すれば、人数の多い教室でスピーキングの力を付けさせるのは殆ど不可能だということである。

どういう時に会話力の無さを感じるか尋ねると、「言いたいことが言えないとき」という答えである。その原因は、「単語を知らない」、「センテンスの組み立てが出来ない」等と予想通りの理由を挙げている。

このような点から、筆者の授業では会話を体験するチャンスに備えるべく、そこで必要になると思われる語彙・表現のinputに注力している。

11. 87.1%が「国際化時代で英語は大切だ」と信じている。

この点、実に「英語教」は浸透しているな、と感心する。冷静に考えて、実社会においてこれほど多くの人が本当に英語を必要とするだろうか。大学教育の一教科としての英語の学習は決して外すことは出来ないと思うが、所謂「使える英語」を必要とする人は、今の時代にあっても寧ろ少数と見るべきだろう。ましてや会話に自信のない学生が95.7%もいるにも拘わらず「使える英語」の必要性を過大に意識させることは教育上プラスになるとは思えない。それによって多くの学習者に無用の挫折感を味わわせ、単に英語に関する能力に止まらず自身の全体的な能力に対する自信喪失に繋がってしまうことすら考えられる。

「英語の必要性」に否定的な意見の持ち主は12.9%いる。その理由を、「言葉は道具であってそれ以上ではないのだから、国際化を唱えるならば他に学ぶ事はあると思う。本当に必要なら、或いは英語圏の中で生活していれば身につくと思うから」、「外国の人と接する時が余りないのに英語は大切だと言われても意味がない」等と書いており、肯ける部分もある。

某新聞の投書欄で群馬県高崎市の地方公務員、本間秀一氏（30才）の「アピール」を読んで英語教育界の外の人ですらこのような認識を持っていることに感心した。

「...私は英語が身につかない主たる要因は、教育のあり方ではなく、英語を使わねばならない差し迫った事情がわが国にないことだと考える。語学力は、自発的な学習を継続しないと向上しない。継続には具体的かつ脅迫的ともいえるくらいの動機づけを要する。...仮に早期会話学習を導入して会話力がついて（母国語でない以上、文字からの学習も同時に進行しないと無理だと思うが）行き着く先は同じだろう。...英語を真に必要とする人は、グローバル化が進んでいる現在でも国民の一部であって、全国のすべての小学生が英会話を習うのは、平等主義の履き違いであり、時間と労力の無駄である。英語よりも古典を含む国語教育を充実し、自国語への愛着を深める人づくりをめざすべきだ。」

一般の人がここまでの認識を持っているにも拘わらず、近頃の文部科学省の諸施策を見ていると文部官僚達はこうしたことを分かっているのかと嘆きたくなる。

又、現代日本にとっての国際化時代とは何なのかについて「日本人はなぜ英語が出来ないか」の著者、鈴木孝夫氏のような視点からの議論がもっと行なわれるべきだと思う。

12. 学生は案外「受験英語」を否定的に見ていない。

筆者は常々「受験英語」を役に立たないとする一般の風潮に反発を感じている。もし今受験に英語が不要になったら、更に一段と日本人の英語力が低下することは間違いない。然し、58%もの学生が「役に立つ部分もある」と答えたので安堵を覚えた。更に、29.2%が「基礎づくりに役立つ」と答えている。又、「受験があったからこそ勉強した」を11.8%の学生が肯定している。このように一般の否定的な見方と違って、学生達は案外、正当な評価をしているのである。

13. 受験時代において、学校はやはり生徒達の頼りであった。

92%もの学生が「自分の学校」が英語の勉強の場であったと答えている。更に、この中で英語力をつけるのに最も役立った場として「自分の学校」を挙げた者が18.9%いる。塾や予備校はそれぞれ8.5%、6.1%に過ぎない。

このような数字を見たら高校の先生方は生徒の期待に応えるべく奮起せざるを得ないだろう。

14. 一般学生はやはり「使える英語」を学びたがっている。

「英会話の力をつけたい」65.1%、「実社会に出て使える英語を学びたい」51.4%、「TOEFL、TOEIC、英検などの試験に役立つ英語を学びたい」16.0%である。これらは予想通りの解答であった。「現代小説」「古典」「専攻分野に関する英書を学びたい」がそれぞれ6.1%、8.0%、6.6%で、「ビデオ」「native教師による授業」「L.L.」はそれぞれ14.6%、11.3%、3.8%となっている。

筆者は以前に「対話英語における語彙と表現」という小論を書いた。その中で「発話能力を高めるには総合的な英語力の強化を図る一方で、やはり‘対話向きの’語彙と表現を別途に身につける必要がありそうである」と書いた。然し、65%を超える会話願望者の多くは、‘総合的な英語力’の上に会話力が築かれるという風には考えていない様だ。会話というのは読んだり書いたりとは何か別個の能力と考えている様に思える。総合的な英語力の基礎もないのに市中の会話学校に通って成果を挙げ得ないまま終わる人達も恐らく同じ考え方であろう。そこではnativeが喋るのを一方的に聞くだけであったり、質問にただYesやNoを発するだけでその後の言葉が続かないといった情景が少なくない筈だ。そんな状態でも会話を勉強している‘気分’になっている場合が多いのではないか。

筆者の担当授業の一つで「使える対話英語」を意識したテキストを使ったが、

学生には「教室で出来ることは皆の頭の中に英語をinputするところまで」と言っている。その後、inputされた英語を頭にしっかりと定着させるのは「学生自身による能動的なoutputの繰り返し」によるしかないのである。

考えて見れば、母国語である日本語の場合も、覚えたことを何回となくoutputしたことによって長年掛けて漸く定着したのである。然し、繰り返すようだが、inputなしにはoutputは出来得ない。つまり、主に英文を読むことを通じて英語の語彙・表現をinputしておかなければ、outputとしての会話が出来る訳がないのである。今程コミュニケーションが騒がれていなかった時代にも、例えば日本の商社マン達が立派に英語を駆使して世界中で活躍出来たのは何故か。それは彼らがしっかりとした英語のinputを持っていたからである。こう考えて来ると、近年のコミュニケーションへの行き過ぎとも思える傾斜には大きな危惧を覚える。所謂、砂上の楼閣になることを恐れる。

又、上に述べた「outputの繰り返し」は周囲の環境、本人の適性、つまり勤勉さとか話し好きとかによって誰にでも出来るというものではないのだから、全ての日本人が会話が出来る様になるというのは一種の幻想と言うべきである。文科省の指導のもと、日本国民挙ってその幻想を追うことで多くの経済的、時間的、又、学習のエネルギーの面で大きな無駄をしている様に思う。既にその弊害は生徒、学生の国語力の低下に顕著に現れていると見るべきである。

以上、本学の新入生の英語学習意識を纏めてみると凡そ次の様になる。

83%が英語嫌いである。はっきりと「嫌い」と答えた者の71.7%が中学までに「嫌い」になっている。嫌いになった理由のトップは「文法」である。91.4%の学生が英語を「難しい」と思っているが、その原因のトップもまた「文法」である。

95.7%の学生が会話に自信がない。それでも、国際化時代と騒ぐ周囲の影響で87.1%の学生が「英語は大切だ」と思っている。

中学で「英語で考えなさい」などと指導された学生がいる一方で、これまで一度も「英語で考えている」と感じた事がない者は、少なくとも67.9%いる。「英語を使っている」という実感は、殆どが外国人と話している時に感じている。高校までで48.1%が「楽しい」と思う授業を体験しているが、そのうち38.2%が「楽しかったが余り役立っていない」と振り返っている。その一方、53.8%の学生が「英語の授業は楽しい筈だ」と思っている。

92%もの学生が「自分の学校」を英語の学習の場であったと答えている。高校のコミュニケーションの授業の評価は低い。然し、「受験英語」に対してはよく聞かれる世評とは違って否定的に見ていない。

大学に対しては、65.1%の学生が英会話の力がつく様な授業を期待している。次に、51.4%が「実社会で使えるような英語を学びたい」としている。

II 授業計画

上記 I において既に一部言及しているが、一年次生の授業の基本的枠組みは下記の通りである。

1. テキストは学生が取り組み易い難度の低いものを選ぶ。

内容は対話英語を主体としたものにし、且つinputを意識したreading passageのあるもの。一週間に二回授業があるクラスではこれに加えてnativeが日本について書いたエッセーを取り上げる。身近かなことが英語でどのように書かれているかを学んでもらうためである。

2. 導入としてジャパン・タイムズの記事を紹介する。

見出しと本文の一部を黒板に書いて手短かに解説し、時に記事に関する筆者の私見を披瀝する。USA Todayを一回おきに使ったこともあるが、やはり日本の出来事の方が身近に感じられ、比較的興味を持つ様である。

3. テキストは先ず学生に音読させる。

学生の授業参加はこれだけにしている。週に一回の授業が普通なので、少ない時間を学生の訳や答えを待つことで浪費しないためである。読ませながらアクセントに最も注意し、間違いはすぐ直し、学生にもう一度正しく読ませる。-ateや-ityのつく単語におけるアクセント、綴りの中のxやquの発音における「規則性」を繰り返し強調して、単なる暗記だけに依らず英語を注意深く見、少し深く考える癖を付けさせる様に努めている。

音読の意義については土屋澄男氏の著書に詳述されている。会話の相手がいつもいるという環境は稀なのだから、独りでoutputに励もうとするなら残された手段はやはり音読しかない。会話の独習における音読の重要性はもっと強調されてよい筈だ。

4. 今度は筆者が音読をしながら細かく解説する。

英文の頭からセンス・グループで訳し下ろす。特に関係代名詞の戻し訳などはせず、先行詞を代名詞に置き替えて訳してみせる。こなれた日本文への

‘翻訳’は志向せず、直訳で済みます。書かれている内容が分かれば、それを普通の日本語にするくらい大学生なら出来る筈、と説明している。

5. 最後にnativeによるテープを聞かせる。

学生は筆者の音読との比較が出来る。これで最初の仲間の学生の分も含め、同じ英語を都合3回耳から聞くことになる。

6. 進度は速く、を志向している。

そうすることによって学生が接する英語の量を最大化する。筆者は、学習量に対して記憶の歩留まり率は一定という仮説に立っているので、学習の絶対量が多いほど英語の残存量は多くなると信じるからである。

7. 次の週、英文記事紹介の後、「前回の復習」を行なう。

復習には二種類ある。一つは主に連語について日本語でクラス全体に問い掛け、対応する英語を思い出させる。思い出せなければ、その英語が未だ頭に定着していないことになる。答えをすぐ板書するので学生はもう一度その英語を覚え直すことになる。二つ目はテキストを開かせ、重要表現を再確認する。大学生に復習のお手伝いはどうかとも思うが、外国語は要するに記憶しなくては使いたい時に使えない訳で、そのためには繰り返しが肝要と思うからである。勤勉な学生ならこれで自分の予習、授業、自分の復習、翌週の教室での復習、2度目の自分での復習、期末テストでの勉強と6回も重要な語彙・表現と接することになる。

ここで、川島幸希氏が引用している夏目漱石の言葉を引用したい。

「困難の最なるものは文章と会話である。然し文章は近年中々旨く出来る人が殖えて来た模様であるが、会話に至ると却って二十年前よりは下手になったかも知れない。是は教育界に前程西洋人を余計使わないのと、教科書を英語のまま暗誦する事が行はれなくなったのが主な原因になっている。…会話は学問ではない、技術だから其性質として練習以外に発達の望のないものである。即ち腕組をして考へる代りに、二度でも三度でも同じ事を繰り返せば、繰り返した丈上手になるといふ意味である。」

III 授業評価

筆者の平成13年度の最終授業の冒頭で学生による授業評価を行なった。(方法は末尾添付) 予め用意したコメント項目の多くは過去のアンケートに現れた学生の解答例を踏まえたものである。

1. 対話英語を‘書ける’ようにすることを狙った授業の評価（対象、史学科生127名）

投票の多かった項目の上位6つを挙げると下記の通り。

- ① 79.5% 「毎回の授業の始めの復習は役に立ったと思う」
- ② 70.1% 「毎回授業の始めにジャパン・タイムズの記事の短い紹介をしてくれたのは、良かった」
- ③ 69.3% 「楽しい授業ではなかったが、少しは勉強になった」
- ④ 58.3% 「復習で、日本語で聞いて対応する英語を思い出させる方法はいいやり方だったと思う」
- ⑤ 55.9% 「一人一人当てて音読をさせたのはよかったと思う」
- ⑥ 36.2% 「メリハリのない単調な授業だった」

2. エッセー（内容はアイルランド人による日本観）の読解の授業の評価（対象、国文科生43名）但し、このクラスでは英字新聞の紹介は行っていない。

- ① 79.1% 上の③と同じ
- ② 69.8% 上の①と同じ
- ③ 62.8% 「私にとっては進み方が早過ぎて、ついて行くのが大変だった」
- ④ 58.1% 「‘解説’でなく、きちんとした‘翻訳’をしてくれないと、よく英文を理解出来ない」
- ⑤ 55.8% 上の⑤と同じ
- ⑥ 46.5% 上の④と同じ

以上の結果から、筆者の授業計画の柱を成している項目に関しては学生達の大方の支持を得ていると判断した。早過ぎること、解説しきれないことに批判票が多いが、筆者としては理由があつてのことで殊更改めようという気持ちにはなれない。ただ、「単調さ」については常々考えてはいるが、「単調」でなくするための具体的な方法を未だ見出せないでいる。もし学生の期待するものが笑わせる冗談とか、余談・雑談であるなら筆者としては応じられないと思っている。

アンケートでは、項目選択の後に自由記述をしてもらった。その一部を以下に摘記する。

* 大学での英語は高校以上に難しくなると思うと気が重かったが、会話表現など身近な英語を扱っていたためついていくことができたと思う。書き言葉でしか用いないような表現が並んだ長い文章を読み解くよりやりやすかった。

* 講義の進む速さもちょうど良く、またテキストも難し過ぎなかったのでわかりやすかった。

* 私はもう一つ英語を受講しているが、英語の力がついたと思うのはこの講義だ。たしかに生徒の参加は少なかったが、使える英語を習えたことのほうが大きい。生徒に訳をさせるとやってこなかったり、まちがっていたりと講義の時間が少なくなり力はつかなかったと思う。まちがった訳などをおぼえてしまうリスクがないのがよかった。私は講義の前にやる英語のニュースが好きでした。ずっと続けて下さい。

* ニュースの時の考え方が面白く役に立った。あまり英語のレベルが難し過ぎない所が良かった。英語が専門じゃない学生にはこの位が良いと思う。

* 授業中に当てられ、みんながいる中で音読は何も感じない大学生活の中ではけっこうおもしろかった。

* 以前は英語が好きではなかったが、この授業は参加することに抵抗はなかった。また前回の復習はとても助かった。

* 和訳する感じがこの一年でなんとなくわかってきた。そのおかげで英文を読むのが少し好きになった。

* 授業では英語を聞いてから日本語を教えてもらって、復習の時は逆に日本語を先に聞いてから英語を教えてもらうので両方覚えられて良いと思った。

* 英文を読む時に間違ってる発音等をすぐに直してもらえるのがよかった。

* 発音・アクセントをここまで徹底的になおされるのは今までの英語の授業ではなかったので、ためになったし自分でも気をつけて発音しようと思うようになった。

* 「大」嫌いという域から逃れられた様に感じます。

* 他の先生とは違って学生をバカにしているところがなかったと思う。ある先生は心底学生をバカにしているのでこの授業はうれしかった。

* もともと英語は大嫌いでしたが、この授業は受けようという気になりました。

* 私は英語が嫌いなので、授業が楽しかったとはいえませんが、この授業のおかげで少し興味がでてきた気がします。

これでは、都合の良いコメントばかりを取り上げたと言われそうだが、自分としては公平、妥当と思われるものを集約したと信じている。

おわりに

既述したことと重複する部分もあるが、英語教育に関する筆者なりの主張を二、三記して本論の結びとしたい。

1. 四技能の位置づけと優先順位を再考すべきである。

今、日本の英語教育に対する評価は低い。六年以上やっても英語が話せない、使えないというのが最もよく聞かれる批判である。然し、前述したようにビジネスの分野では日本人は英語を中心とした現地語を使って世界中で活躍している。ではこのことが最近の英語重視、コミュニケーション重視の教育の成果なのかというとそんなことはない。昔から少数であっても仕事の上で英語を必要とする人々は立派にこれを使いこなして来た。その頃は未だ今のようなコミュニケーション重視の風潮はなかった。しかし「読む、書く」は間違いなく今よりしっかり勉強していた。そのお蔭で基礎が出来ていたのである。つまり、読むことを通して新しい語彙・表現を頭にinputし、覚えた英語を書くことによってoutputし、その繰り返しによって頭脳に英語が定着していたのである。定着した英語はやがて、英語を使わなくては仕事にならない状況下でoutputが繰り返され、相手とのコミュニケーションにより、又、inputが増えるというプラスの循環になったのである。聞いて相手の言うことが理解出来るのは、既に自分の頭の中に意味を持った言葉としての‘音’がinputされ、記憶されているからである。母国語を考えればこのことは分かる筈である。逆にinputが不十分な人の場合は英語を音としては聞き取れても、意味のある言葉として聞き取ることは十分に出来ない。内容の難しい英語を聞いても分からないのはこのためである。

この論文を書いているとき、新聞のコラムに、或全国チェーンの会話学校の代表がこう書いていた。「言葉というものは本来、話す、聞く、書く、読むという順で覚えるものです。」果たしてそうだろうか。筆者はそうは思わない。母国語である日本語は自然に覚えた。然し、その場合でも順番は、聞く、話す（真似る、でもある）、読む、書くであろう。これに対し、外国語は、日本で育つ限り、先ず読むことによってinputするしかない。そして、書くことでそれを確かなものにし、英語を話すというoutputを経て、漸く相手の言葉を意味を持つ音として

聞き取れる様になるのではないか。

現今のコミュニケーション偏重は四技能学習の優先順位を誤っていると断じざるを得ない。中学・高校では「読む」と「書く」に集中すべきである。そうすると中・高のALTは不要になる。もともと英語が話せるというだけで英語の教師が務まる訳がないのだが、需要の高まる中、数の充足のため程度の落ちるALTも少なくない様だ。中学・高校のALTを排除する代わりに「読み、書き」の基礎が出来ている大学生にはTESOLの資格を有するnativeを当てる様にする。又、大学では外国語は選択にして、その代わり受講者に対しては授業時間数を現状の数倍に増やして、十分に鍛える様にする。数は少なくともレベルの高い英語力を持つ学生を養成するのである。本気で国際化を唱えるのなら少数精鋭の高度な英語運用力の保持者を養成すべきである。

土屋氏は次の様に述べている。「英語が日常的に使われていない日本で英語を学ぶ場合には最初から会話を学ぶのはけっして得策ではない。付け焼き刃の学習は記憶に残らず、発展性がないからである。」

田中菊雄氏はこう述べる。「立派な実用英語こそはむしろ英語学習の頂点だということを一般の人の心に植え付けたいと思っている。もちろん齒の浮くような軽薄な猿まね英語をいつているのではない。訥弁で多少の日本語訛りはあっても教養のうかがわれる会話でなくてはいけないと思う。そこで私は読むことを基底とし、書くことを中屋とし、話すことを頂点とするピラミッド型の英語学習法を説いてみたいと思っている。」

2. 誰もが英語を話せるようになるという幻想は捨てるべきである。

人それぞれ得意なものがある。そして不得手なものがある。どうしても不思議でならないのは、誰でも数学が出来る筈とは決して思わないのに、英語に関しては教え方が良ければ皆出来る様になる筈、とされていることだ。数学の出来ない人はこの世の中に一杯いるのに、数学の教え方が悪い所為だと世間一般が批判するのを聞いたことがない。教え方も大切ではあるが、同じ様に教えても受け手の適性によってその成果は大きく違ってくるのである。

適性とは例えば記憶力である。NHKラジオ「ビジネス英会話」の講師、杉田敏氏がこう書いていた。「実は私は、中学時代から英単語を覚えるのに苦勞をしたことがあまりありません。...私の場合は吸収する力が人一倍強かったように思えます。コンピュータでいえばメモリーの容量が大きいのでしょう。」田中菊雄

氏も幼い頃の思い出をこう書いている。「誰から教わったこともなく、文字を早くからおぼえてしまったのです。…小学校に上がらないうちに、もう日本外史の一部を暗誦していました。これは父が兄に素読を授けるのを側に座っていて覚えたのです。父は私の物覚えのよいことを驚嘆していました。」記憶力の他にも、言葉に対する関心の強さ、感性、こつこつと学ぶ勤勉さ、粘り強さ等を挙げることが出来る。この様な語学に向けた資質を皆が備えていることなど有り得ないではないか。ケネディ大統領の言葉に“All of us do not have equal talent, but all of us should have an equal opportunity to develop our talent.” というのがある。勿論彼のポイントは「平等の機会」の方にあるのだが、前半はごく当然のことと考えているのである。然るに、戦後の日本では万事平等の世になってしまった。それが行き過ぎて学習の‘成果’も皆が同じ様に達成出来る筈と誤って考えられるようになった。そして行き着いたのは、同じ様に低レベルの学習成果である。どう考えても、学習能力や知力における平等というのは全くの幻想としか言い様がない。誰もが英語が出来る筈というのは大幻想である。皆が英語の学習に無駄なエネルギーを投入することを止めて、各人の適性に応じた能力を伸ばせば良いのである。

こう考えてくると、2000年9月30日の日本経済新聞掲載の東京学芸大の金谷憲氏の提言は示唆に富んでいる。一部を引用する。

「英語教育改革を考えると、国民一般に対して基礎的英語力の獲得を保証することと、必要とする人に高い英語力を身につけさせることを分けて考えなければいけない。この二つを明確に区別しないと往々にして国民一般に過重な教育目標を設定することになる。その結果、簡単な英語でも定着しないという結果を招く。これを避けなければ適切な英語教育は行われない。」

3. Thinking in Englishを初学者に強調するのは止めよ。寧ろ、日本語との比較を通じて英語の特徴を理解させよう。

「英語で考えなさい」という、恰好はいいが実体の分からない指導は止めたいものだ。日本語を意識することが英語習得の障害になるとは思わない。仮に障害があるとしても、日本人はどうしても日本語を頭の中から追い出せないのだから、それは避けられない宿命なのだ。外山氏の著書を読むと、日本語との比較をすることで英語の特徴について深い理解が得られることがよく分かる。日本人なら、表現したいことを先ず日本語で考えてしまうのが自然の頭の働きである。その日

本語を英語ではどう言うかを考えたとしても、結果として正しい英語が出て来れば何も問題はないではないか。頭の中の働きを確認出来ないのに、日本語を介在させるな、と要求してもそれは無理な話である。日本語的な英語でも一応相手に意志が伝われば良いではないか。大部分の人にとってはそれで十分であろう。その上のレベルに到達するのは職業上本当に必要な人々だけでよいのである。世界には多くの植民地英語がある。彼らはひどい発音でも堂々と話す。筆者は昔、インド人ビジネスマンの凄まじい英語に音を上げたことがある。我々日本人も Japanese English と揶揄されても怯まず話せばよいと思う。実際、自分で思うほど日本人の英語の発音は悪くない。このことは海外に行かずとも、日本で学ぶアジアの留学生を教えた経験のある人にはよく分かっている筈である。

大津栄一郎氏は著書の‘まえがき’でこう述べている。

「日本語と英語がどんなに違うかを解説しながら、英語的なものの見方を語る本である。」

又、‘あとがき’で「日本語がいかに私を支配しているかは実感することができた。」

筆者は大津氏の著書から改めて英語が他動詞中心の言語であることを教えられ、英語における受動態や無生物主語の必然性、又、makeやgiveのような動詞の多用についても納得を得た。

4. 英語学習の教養的側面を重視し過ぎるのは止めよう。

普通の日本人にとって、今、英語を通じてしか得られない教養というものほどだけあるだろうか。明治の頃は兎も角、現代にあっては教養は日本語を通じて学べばよい。文部科学省の提唱する‘国際理解’は英語を通じてしか学べないということはない。平均的日本人は日本語の新聞を丹念に読み、深く考えるだけで十分、一般に言われる国際理解を深めることが出来る。国際理解を至上の目的のように強調するのも程度問題である。今のままで行けば国際‘迎合’に墮してしまふ恐れすらある。日本を世界に向けてアピールして行くには確かに英語が一番便利である。然し、アピールする内容は日本語で学ばなくては一般の人にとっては無理であろう。一般学生における英語学習の目的はもっと単純に「言葉を覚えること」と考えるべきである。言葉を覚えるための努力の副次的な効果として教養に役立つならそれは結構である。その反対に、教養的で難度の高い英語は「使える英語」の習得を目的とする場合、労多くして得るところが少ないと言って過

言ではない。然し、英文学を志す人々は並みの英語学習者とは違い、より一段高いところを目指すのである。それは殊更に文学を学ぶことのない一般の日本人のほかに、文学を志す人達が居てよいと同様である。大胆な言い方をすれば、「使える英語」と「教養英語」は両立し難いということである。

尚、英語教育に於いて、教養を重視するか、実用性を重視するかについては、首藤信一氏の「わが国における英語教育存廃論の系譜」に詳しい。

5. 大学生を将来の志望別、能力別に分ければ英語教育の成果が更に上がるであろう。

ここでいう志望とは、大学の教員、中・高の教員、ビジネスマンの三グループである。三つが無理なら、教員とビジネスの二つでもよい。その人数割合を仮に10%、15%、75%とする。カリキュラムも当然違って来る。名称が英文学科でもコースとして分ければ良い。能力に隔たりのある学生を一つのクラスに纏めてしまうと、学生に難しさに対する諦めか、レベルの低さに対する不満が生じ、結果、誰も満足しないことになる。グループ化によって必要な教室、設備、教員が多く要るが、それが出来ないのであれば、そこそこの成果で満足するしかない。

最近、教員の就職が難しいと聞く。然し、英語の教員が務まる程の実力を本当に持っている学生なら、英語以外が専門の学生と一緒に就職試験を受けても合格する可能性は十分にある。実際、会社の求める人材はそれぞれの企業で多様なものがあるのである。学生は自ら自分の進む道を狭めることはない。教員を志望していた学生でも、先ずビジネス社会を経験して、その後チャンスが来たら教員に転じてもよいのである。

6. 日本人はなぜ英語が話せないか。

筆者の結論は、禅問答めくが「それは話さないから」となる。何語であれ、言葉というものは話すことを何回となく繰り返すことによって漸く頭に定着して自在に使えるようになるのである。英語もその点に於いては同じである。然し一方で、「話す為に必要な英語がinputされていない人は、話すというoutputが出来ない」ことを忘れてはならない。会話の達人と言われる人達は他人の見えない所で死に物狂いの努力をしている様だ。素質の上に、更に努力を積み重ねてこそ可能なのである。私自身もそうだが、並みの人間はなかなか達人にはなれない。それでも一応話せる様になるには、自分で実際に「話す」訓練を重ねるしかない。

‘話す’ という行為は自分にしか出来ない。他人には代わって貰えないのである。その意味で、英会話は結局、人から教えられるものではなく、自分自身のためまぬ努力で習得するものだ、と結論づけてよいだろう。

最後に、土屋氏の言葉を引用しておく。

「英語はいわゆる知識教科ではない。むろん知識も関係するが、英語についての知識をたくわえることが目的ではない。それを使えなくてはならないのだ。だから技術教科と言ったほうがよい。だれも、学校で習っただけで、人前でピアノがひけるほど上達する人はいない。英語も同じである。学校で習っただけで英語をマスターする人などいないのである。もしいるとしたら、その人は学校で習った数倍の時間を自己学習のために費やしたはずである。」

「このように、ことばというのはすべて、使っているうちに記憶すると考えるのが正しいのではなからうか。」

—以上—

[参考文献]

1. 「教室における‘英語的発想’とThinking in English」吉家哲夫：別府大学アジア歴史文化研究所報(1997)
2. 「日本人の英語」マーク・ピーターセン：岩波新書(1990)
3. 「英語指導の基礎技術」土屋澄男：大修館書店(1983)
4. 「英語研究者のために」(新版)田中菊雄：講談社学術文庫(1966)
5. 「日本人はなぜ英語ができないか」鈴木孝夫：岩波新書(1999)
6. 「対話英語における語彙と表現」吉家哲夫：別府大学アジア歴史文化研究所報(1998)
7. 「英語教師夏目漱石」川島幸希：新潮選書(2000)
8. 「あなたも英語をマスターできる」土屋澄男：茅ヶ崎出版(1998)
9. 「英語の発想・日本語の発想」外山滋比古：NHKブックス(1992)
10. 「英語の感覚」(上)、(下)大津栄一郎：岩波新書(1993)(1994)
11. 「わが国における英語教育存廃論の系譜」首藤信一：別府大学短期大学部紀要(1998)

英語学習に関するアンケート

2001年4月

別府大学

() 学科、1年() 組

出席番号() 番、氏名()

1-1 英語の学習について、あなたの今の気持ちを正直に言うと次のどれですか。該当する答えの記号を○で囲んで下さい。

- (a) とても好き (b) 好き (c) あまり好きではない
(d) 嫌い (e) どちらでもない

1-2 上の質問で(c)や(d)が答えの人に尋ねます。下記の項目にあなたに該当する理由があれば、その記号を○で囲んで下さい。ふたつ以上に○印をつけても構いません。

その他の理由なら、それを下の余白に具体的に書いて下さい。又、理由の項目について何か補足があれば書き加えて下さい。

- (イ) 文法 (ロ) 発音 (ハ) 単語 (ニ) 熟語 (ホ) その他

1-3 上の質問1-1で(d)の“嫌い”が答えの人に尋ねます。あなたの記憶ではいつから“嫌い”になりましたか。下の学年(又は時期)を○で囲んで下さい。

- 中1、中2、中3、高1、高2、高3、中学のいつか、
高校のいつか、浪人中

2-1 英語は難しいと思いますか。あなたに該当する答えの記号を○で囲んで下さい。

- (a) とても難しい (b) 難しい (c) さほど難しくない
(d) 易しい (e) どちらとも言えない

2-2 上の2-1で(a)や(b)が答えの人に尋ねます。何が難しいのか、下記の項目の中からあなたに該当するものを選んでその記号を○で囲んで下さい。ふたつ以上に○をしても構いません。又、その他の理由や何か補足したいことがあれば、

下の余白に書いて下さい。

- (イ) 文法 (ロ) 発音 (ハ) 単語 (ニ) 熟語 (ホ) 文型
(ヘ) 英訳 (ト) 和訳 (チ) その他

3-1 あなたは、これまでの英語の学習で先生から「英語の勉強をするときは、(日本語でなく) 英語で考えなさい」と教えられたことがありますか。「ある」が答えの人だけ次の質問に答えて下さい。

初めてこのことを先生から教えられたのは、いつですか。下の学年(又は時期)を○で囲んで下さい。

中1、中2、中3、高1、高2、高3、中学のいつか、
高校のいつか、浪人中

3-2 「私は今、英語で考えている。」と実感した経験のある人は、いつ頃、そしてどういう時にそれを感じたのか、思い出して出来るだけ詳しく下の余白に書いて下さい。

3-3 私は一度も「英語で考えている」などと感じたことはない、と思う人は、下の英語を○で囲んで下さい。

No, I haven't.

4-1 あなたはこれまでの英語の学習で「楽しい」と思ったことがありますか。「ある」が答えの人は、その体験を下の余白に具体的に書いて下さい。そしてその「楽しい」体験の時期も教えて下さい。

4-2 今考えてみて、その「楽しかった」英語の学習は、あなたにとってどんな効果をもたらしたと思っていますか。下の項目から該当するものを選び、その記号を○で囲んで下さい。ふたつ以上に○をしても構いません。(a)と(e)については、括弧の中に補足説明をして下さい。

- (a) 英語力をつけるのに役立った。特に、()
(b) 英語の勉強に興味を持つようになった。

- (c) そのおかげで今私は英語が出来る。
- (d) 楽しかったが、余り役立っていない。
- (e) その他 ()

4-3 あなたが次の様な意見を聞いたとして、同感ですか。下記の該当する答えを○で囲んで下さい。「英語は外国語だから、日本語のように自然に覚えられる訳ではない。出来るようになるには兎に角憶えなくてはならない。憶えるのは誰にとっても苦痛だから、英語の勉強が‘楽しい’はずがない。」

- (a) 同感だ
- (b) 同感ではない (なにか補足があれば、下の余白に書いて下さい。)

5 あなたが「私は今英語を使っている！」という充実感を覚えたのは、いつ、どのような時でしたか。下の余白に具体的に記入して下さい。(このような体験のない人は次へ進んで下さい。)

6-1 あなたは高校生の時、「コミュニケーション」の授業を受けましたか。今思い出してみても、その授業が自分の会話力をつけるのに役だったと思いますか。

- (a) 役だったと思う
- (b) あまり役立っていない
- (c) 全く役立っていない
- (d) よく分からない

6-2 上の質問で(b)や(c)が答えの人に尋ねます。なぜそうなのか考えて、あなたの意見を下の余白に書いて下さい。

7-1 あなたは自分の考えを人に英語で伝える会話力について自信がありますか。

- (a) かなりある
- (b) なんとか出来る
- (c) あまり自信がない
- (d) 全く駄目

7-2 上の質問で(a)や(b)が答えの人に尋ねます。あなたの英会話の相手はどういう人ですか。いくつか例を挙げて下さい。

もうひとつ尋ねます。あなたのその会話力はどういうことによって身についたのでしょうか。具体的に説明して下さい。例えば、先生に教えられたのか、自分自身の努力によるのか、といったような事です。

7-3. 7-1の質問で(c)や(d)が答えの人に尋ねます。あなたがそのように感ずるのは、どういう時、また、どのような点についてですか。下の余白に具体的に書いて下さい。

8-1よく「これからは国際化時代だから英語が出来ないと色々困ることがある。だから英語の勉強は大切だ。」と言われますが、このことについてあなたの意見はどうですか。

- (a) 同感だ (b) 同感できない

8-2上の質問で(b)の答えの人は、その理由を教えてください。

9-1よく「受験英語は役に立たない」と言われますが、あなたの意見はどうですか。あなたに該当するものを下記の項目から選んでその記号を○で囲んで下さい。(ふたつ以上に○をしてもよい。)

- (イ) 役に立たない
(ロ) 役に立つ部分もある
(ハ) 英語の基礎作りに役立つ
(ニ) 受験がなければ英語など勉強しなくなかった
(ホ) 役に立つ英語というのは受験英語とどう違うのか分からない
(ヘ) その他 (下の余白に説明して下さい。)

9-2 受験時代(高校2、3年)あなたの英語の勉強の場はどこでしたか。ふたつ以上に○をしても構いません。あなたの英語力をつけるのに最も役立ったと思うものに二重○をつけて下さい。

- (イ) 自分の学校
(ロ) 学校以外の個人経営の塾

- (ハ) ラジオやテレビの英語講座
- (ニ) 受験雑誌
- (ホ) 浪人中、予備校で
- (ヘ) 在学中から予備校やチェーン組織の塾で
- (ト) 家庭教師
- (チ) その他 (下の余白に説明して下さい。)

10 大学での英語の授業はどういうものであって欲しいか、あなたが今抱いている期待を答えて下さい。下記の項目に該当するものがあれば、その記号を○で囲んで下さい。(ふたつ以上に○をしてもよい。)

- (a) 英会話の力を付けたい
- (b) 英語の現代小説を読みたい。例えば、() の作品
- (c) 将来、実社会に出て使えるような英語を学びたい
- (d) ビデオを使う授業
- (e) 英語を母国語とする外国人 (natives) による授業
- (f) 専攻分野に関する英書を読みたい
- (g) シェークスピアのような英語の古典を学びたい
- (h) LLを使う授業
- (i) TOEFLやTOEIC、英検のような資格検定試験を受けるのに役立つ授業
- (j) その他 (下の余白に具体的に書いて下さい。)

追記 以上であなたの意見を大体聞けたと思いますが、この他に何か言っておきたい事があれば、どんなことでもよいから、下の余白に書いて下さい。

学年末アンケート（評価）

2002年1月

今日は、この英語の授業に対する評価をしてもらいます。

まず、メモ用紙を用意して下さい。（用紙はB5サイズ以上が望ましい。）それに学科、学年、出席番号、氏名を書いて下さい。今日の出席は、アンケートの解答の提出によって確認するので、提出がないと欠席扱いになります。

やり方は次の通りです。

私の方で評価に関するコメントを20ヶ用意しました。それを一つ一つ私が口頭で二度言いますから、貴方の「評価」と一致すると感じたら、そのコメントの記号だけを解答用紙に書き込んで下さい。

では、始めます。

- (a) 易し過ぎて、意欲が湧かなかった。
- (b) 大学らしい授業を期待していたが、全く期待外れだった。
- (c) 高校以下のレベルに逆戻りしたような感じの授業だった。
- (d) テキストの選択が間違っていると思った。
- (e) この授業は、ただ単位を取るのが目的で我慢して出席した。
- (f) 何の工夫も無い、つまらない授業だった。
- (g) メリハリのない単調な授業だった。
- (h) 少しも楽しくない授業だった。
- (i) 楽しい授業ではなかったが、少しは勉強になった。
- (j) 私にとっては進み方が早過ぎて、ついて行くのが大変だった。
- (k) 毎回の授業の始めの復習は役に立ったと思う。
- (l) 毎回授業の始めにジャパン・タイムズの記事の短い紹介をしてくれたのは、良かった。
- (m) 先生と私達が英語でやり取りするような会話の授業をして欲しかった。
- (n) 先生からの一方通行の授業で、私達の参加が殆どなかった。
- (o) テキストにあることしか教えないので、授業に拡がりがなかった。
- (p) 復習で、日本語で聞いてそれに対応する英語を思い出させる方法はいいやり方だったと思う。
- (q) 「解説」でなく、きちんとした「翻訳」をしてくれないと、よく英文を理解できない。

(r) 一人一人当てて音読をさせたのはよかったと思う。

(s) 音読のとき、発音やアクセントの違いをいちいち直されるのは迷惑だった。

(t) 私達に音読をさせるだけでなく、訳をさせたり、問題の答えも言わせて欲しかった。

[結び] 私の方で用意したコメントは以上で全部です。何か補足したいことがあれば、どんなことでもよいから、書き加えて下さい。もしスペースが足りなければ、紙の裏に書いても構いません。

《注》「読解」のクラスに対しては、(a), (c), (d), (1)の項目を除外。